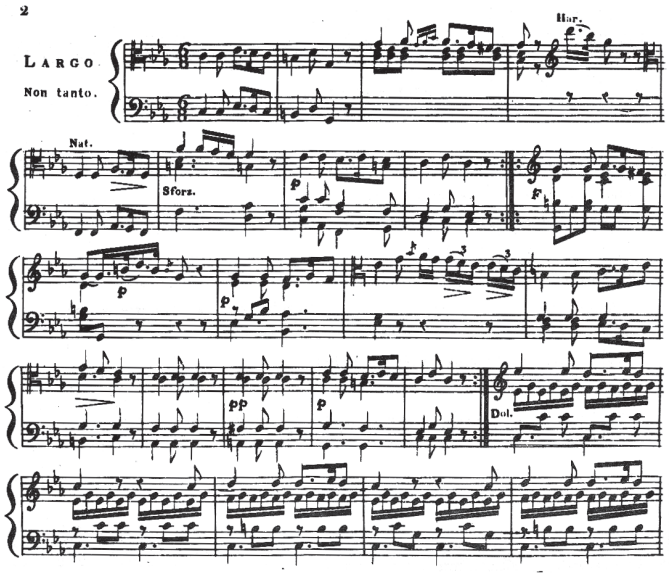
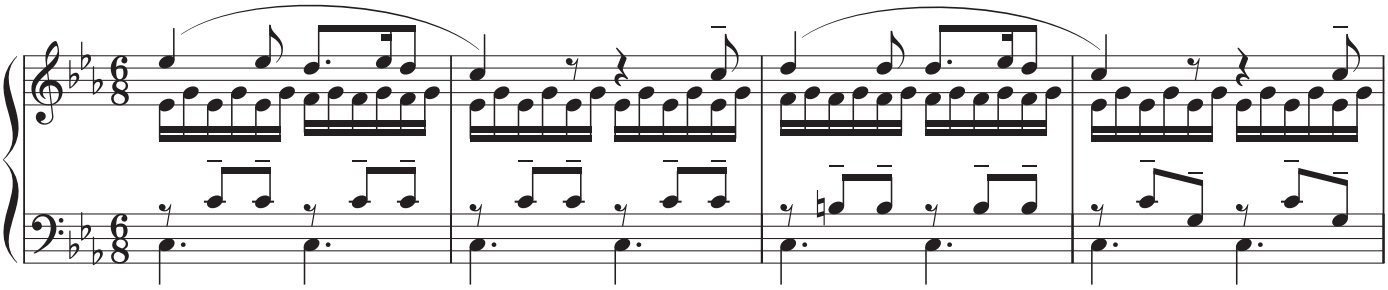
# 忘れられた独奏ギター譜

これはフェルナンド・ソルの幻想曲作品7の冒頭です。当時の出版物のファクシミリをスキャンして掲載しました。ピアノ曲のような二段譜になっていますが、これは紛れもなくギターで独奏可能な楽譜です。原典には作者のソル自らこの書法の優位性を説く一文もありますが、そこで彼は実音を1オクターブ高くしてト音記号（高音部記号）一段に納めるような一般的書法よりも、ヘ音記号（低音部記号）や第3線上ハ音記号（アルト記号）も併用して実音表記する方が良いと主張しています。

この方が真実の姿に近いのだというのがソルの主張ですが、二段譜の採用はギターの広い音域に対応することを第一目的としたものながら、同時に曲の構成を明確に表現することに大きく寄与していると思われます。



この作品の最も魅力的な部分をFinaleで再現したのが上の譜面です。レガートやテヌートを書き易いこともさることながら、ここで注目すべきはソルがこの部分を四声体としていたことが否応なしに分かるという事実です。特にヘ音記号部の上声C音とH音の表記が重要かと思います。

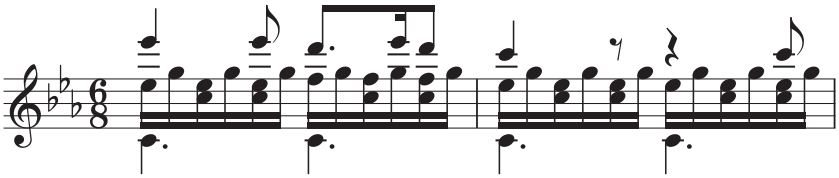
レガートもテヌートも「私ならこう弾く」という意味で書き込みましたが、一段譜でこういった音楽表記を入れていくのは往々にして不可能となります。この部分は古典ギターのレパートリーの中で特に複雑なわけでもなく、そもそも完全な独奏が可能な楽器に一段譜を用いること自体が間違いと言えるのではないでしょうか。

ところで、古典ギターの歴史上最も重要なギタリスト・作曲家であるソルという人は、必ずしもプロフェショナルとしての生き方に長けた人ではなかったように思えます。この画期的なアイデアも一度は出版社が採用してくれたものの、その後二度と現れることなく忘れ去られたようです。理由は明らかです。今も昔もギターはアマチュアの楽器であり、その大衆性にこそ存在価値があるのだから、「こんな小難しい、自己満足的なことをやってもらっちゃ困るよ」と出版社の方が言ったか言わなかったのかは知りませんが、当時の欧州の愛好家達に受け入れてもらえなかったことだけは間違いありません。もちろん現代でも同様でありましょう。

ギターの楽譜は重要な音楽表記を落としたまま、あたかも「以後は直伝・口伝とする」という我が国の武術のごとく出版され続けて来ています。この傾向はバロック時代のタブ譜の復活と共に更に強くなってきているように思います。

後年のタレガがその天才をもってギターの大衆性を巧みに自らの芸術に取り込んでいった事実と比べる時、ソルが残したこの二段譜こそ実に独創的な、彼の人格と実力の象徴のようにも思えるのです。

---



本例冒頭の2小節の一般的なギター譜は左のようになります。ここから内声の弾き方を直感することは難しい。浄書屋としてはこれを否定し、ギター弾きとしては「これで慣れてるんだから変えないでくれ」という自分が居ます。

2007年11月　梅本雅弘